

第1回 フィールドワークのはじまり

永原恵三

1996年4月から科学研究費補助金を3年間（「ツーリズムからみた日本の音楽文化形成」）、重複するかたちで、「旅の文化研究所」助成金を1年間（「伝統芸能の伝承におけるツーリストの関与」）、財団法人東日本鉄道財団助成金を1年間（「文化財をめぐる地域文化へのツーリズムの関与性」）というかなり豪華な助成金をいただきました。ここから私のフィールドワークを通じた研究生生活がはじまりました。ただし、この期間には、後の拙著『合唱の思考』につながる博士論文を執筆し、99年に博士号を授与されており、他方で、大学での教育や運営についても決して疎かになっていないと自負します。このことは、今から考えると、フィールドワークはしんどいですが、私の様々な研究教育や運営活動にとって、大きな軸やエネルギーになっていたのではないかと、と思います。

秋田県鹿角市の芸能である「花輪ばやし」と「大湯大太鼓」、北海道江差町の民謡「江差追分」青森県八戸市の「えんぶり」と「八戸三社大祭」、さらに北海道各地で夏に開催される様々な音楽祭などにうかがいました。科研費をいただいているのだから、「調査研究」という物々しい言い方をすべきですが、とてもそんなおこがましい表現はできません。

あらかじめ文献で知識を得ようが、『日本民謡大観』で五線譜化された楽譜をみようが、ほとんどと言ってよいほどに「知っている」などとは言えない状態です。今日のようにオンラインでの情報があったり、動画がアップされていても、結局、現地に行ってわかることは、自分の「無知」、それだけでしかないのだと思います。

研究報告会の時、ある民俗音楽学者に「私たちは音のわずかな違いにも注意するのですよ。机上の理論を考えるような人にはなにがわかるのかしら」と言われて、へえ～、音楽美学の研究者って「耳がない」と思われているのだ、とカルチャーショックを受けたりしました。音の違いはわかる必要があるでしょう。でもそれをするだけが研究なら、録音機器を持って行って、データ分析をすればよいので、それは私のすることではない、と思いました。

何のためにフィールドワークに行くのか、初めての私にはそんな難しい問いに向き合っている暇はなかったように思います。

ところで、大阪大学大学院博士後期課程在学中にSIMS1990 (Symposium of International Musicological Society)が大阪で開催されて、私は総括的に事務に携わるとともに、日本の現代音楽作曲家の一人にフォーカスした演奏会を担当することになりました。それが、今後も登場するであろう、柴田南雄氏との出会いです。合唱のシアター・ピースが東京混声合唱団によって上演されることになりました。代表作である《追分節考》、《萬歳流し》と《宇宙について》がプログラムです。

その時でした。私は大阪から急に《追分節考》の舞台である信州の「追分」に日帰りで行き、今思うと大変失礼なことをしたのですが、いわゆるアポなしで追分節を伝承しておられる「油屋」を訪問したのです。ちょうどご主人がご不在で、後でお詫びのお手紙をお送りして事なきを得た、という大失敗でした。これが私のフィールドワークのはじまりのはじまりでした。

このプログラムのために柴田家に何度もお邪魔して柴田氏や純子夫人とお話をし、あるいは、その後の合唱研究の核となる、東京混声合唱団指揮者の田中信昭氏にもお話を伺い、また、広島混声合唱団「ある」での指導に同行して、「ある」のメンバーと夜を徹して話をしました。

こうしたことは、恩師の山口修先生（大阪大学名誉教授）が『応用音楽学』などで言われる「フィールドワークの概念の拡大」に通ずることだったのだ、と思います。どこにいても、自分の生活圏でもフィールドワークは可能です。現実や事実を知り、人／ひとと出会いながら、自分がいかに何も知らないか、を知る、相手が何を考えているかを何とかして理解する、そういう機会に恵まれるのは、とても幸せなことだと思います。

(第1回終わり)